プログラム

Ⅰ．ルネサンス宗教曲集
Renaissance sacred music for a cappella choir

1. グレゴリオ聖歌：エレミア哀歌　聖木曜日第１哀歌
Cantus Gregorianus: Lamentatio Prima Primi Diei

2. ラッスス：エレミア哀歌　聖木曜日第１哀歌
Orlandus Lassus: Lamentatio Prima Primi Diei

3. ラッスス：「私の魂は悲しんでいる」
Orlandus Lassus: Tristis est anima mea

Ⅱ．ドイツ・ロマン派～近代　小品集
German romantic and modern-times music for a cappella choir

1. シューマン：「美しいロートラウト姫」ロマンスとバラード作品67-2
Robert Schumann: "Schön Rohtraut" Romanzen und Balladen Op.67-2

2. ラインベルガー：「夕べの歌」3つの宗教的な作品69-3
J.G.Rheinberger: "Abendlied" Drei geistliche Gesänge Op.69-3

3. ベルク：「エッサイの根より」
Alban Berg: Es ist ein Reis entsprungen

4. ディストラー：「荒野の娘」メーリケ合唱曲集作品19-15
H.Distler: "Die Tochter der Heide" Mörike-Chorliederbuch Op.19-15

------ 休憩 ------

Ⅲ．ブラームス：「運命の歌」作品54　室内楽伴奏編曲：内藤晃
Johannes Brahms: Schicksalslied Op.54

Ⅳ．ブラームス：ワルツ集「愛の歌」作品52
作曲者による管弦楽伴奏版 ～ 室内楽伴奏編曲：内藤晃
Johannes Brahms: Liebeslieder Waltzes Op.52 (orchestration by the composer)

1. (1) 話しておくれ、愛しい乙女よ　*Rede, Mädchen*
2. (2) 岩の上を落ちる流れが　*Am Gesteine rauscht die Flut*
3. (4) 美しい夕べの紅のように　*Wie des Abends schöne Röte*
4. (5) 緑のホップの蔦は　*Die grüne Hopfenranke*
5. (6) 小さな、可愛い鳥が　*Ein kleiner, hübscher Vogel*
6. (11) いいや、世間とはうまくやってゆけない　*Nein, es ist nicht auszukommen*
7. (8) あなたの目がやさしく　*Wenn so lind dein Auge mir*
8. (9) ドナウの流れの岸辺に　*Am Donaustrande*

注：　(　)内の数字は、連弾伴奏版での曲番です。

指揮：黒岩英臣（Ⅰ、Ⅲ、Ⅳ）、　橋本光廣（Ⅱ）

ピアノ：内藤晃（Ⅲ、Ⅳ）
室内楽（Ⅲ、Ⅳ）：*vn* 山根あずさ、*vn* 金子都、*va* 大森悠貴、
vc 安井総太郎、*fl* 岡本元輝、*cl* 竹内彬
合唱：クール・プリエール

曲目解説

Ⅰ. ルネサンス宗教曲集

第1ステージは、グレゴリオ聖歌に続き、ラッススの「エレミア哀歌 聖木曜日第1哀歌」とモテット「私の魂は悲しんでいる」を演奏する。

オルランドゥス・ラッスス（Orlandus Lassus、イタリア語形で Orlando di Lasso：1532-1594）は、現ベルギー生まれ、後期ルネサンス・フランドル楽派の代表的作曲家である。幼少期よりヨーロッパ各地を回ってイタリアに渡り、ナポリ、ローマで研鑽を積んだ後、24歳でミュンヘンに移り、バイエルン公の宮廷音楽家として終生を過ごした。1560年以降、ヨーロッパ各地にその名声が広がる。作品は伝統的な様式を守りつつも、言葉の内面にある強い感情が表現されている。羅・伊・仏・独と多種な言語による幅広いジャンルの声楽曲（ミサ曲、モテット、マドリガーレ、シャンソンなど）を2000曲以上作曲した。

「哀歌」は、紀元前586年のバビロンによるエルサレム破壊、バビロン捕囚への嘆き、苦難、悲しみを綴った詩である。旧約聖書のエレミア書に続く詩として収められているが、実際は数名の詩人による作品と考えられている。エルサレムの終焉、神の裁きによる悲劇を予言し、この惨劇を回避しようとした預言者エレミアの思いが、哀歌に刻まれる言葉と重なる。またこの悲劇はキリストの受難にも重なる。神に背いた罪の身代わりがイエス・キリストである。カトリックの典礼では聖週間（復活祭前１週間）のうち、聖なる過越の3日間（後半の木・金・土）の朝課（真夜中のミサ）で、毎日3つの哀歌を朗唱するようになった。聖週間の朝課はキリストの受難に思いをはせ、暗闇で行うため「テネブレ（暗闇）の音楽」とも呼ばれる。

「エレミアの哀歌」がポリフォニーの旋律になったのは15世紀以降で、複数の作曲家による楽曲が存在する。ラッススは3日間各3曲（全9曲）を作曲しており、プリエールでは、これまでに数回演奏している。本日は、このうち「聖木曜日」の1曲目を演奏する。この哀歌はヘブライ語のアルファベットで5節に区切られているが、ラッススの作品は1節～3節（Aleph、Beth、Gimel）までで、最後を『エルサレムよ、エルサレムよ、汝の主なる神に立ち返れ』で結んでいる。

演奏会冒頭のグレゴリオ聖歌は、同じ典礼に用いられる5節まである聖歌で、本日はラッススの曲に合わせ、1節～3節と、最後の『エルサレムよ、・・・』を演奏する。

2曲目のモテット「私の魂は悲しんでいる」は、新約聖書マタイ、マルコ、ルカの3福音書に記されている、キリストの真の受難の始まりとなる「ゲッセマネの祈り」の曲である。このモテットは「哀歌」に対する「応唱」（Responsorium）のひとつであり、キリストが十字架に架けられる前日の祈りである。　　（岸井 泰子）

Ⅱ. ドイツ・ロマン派～近代　小品集

第２ステージでは、ロマン派から近代に至るドイツ系の作曲家４人の小品から、メーリケ（1804-1875）の詩による世俗曲２曲、それと宗教曲２曲を演奏する。

最初の「美しいロートラウト姫」は、ドイツ・ロマン派を代表するロベルト・シューマン（1810-1856）の「ロマンスとバラード集」第１集第２曲である。この曲集は、民謡風の有節詩に、機能和声と陰影を伴う減三和音の曲を付けたもので、ドイツ・ロマン派合唱曲の原点とも言える。メーリケによる詩は、お姫様に、叶わぬ恋心を寄せる少年のお話。曲とともに大変素直なので、特に原語で物語風に演奏するのは、なかなかの難物。創立 50 周年を間近にして、今更ながら取り組むことにしたが、少年のときめきが楽しく伝われば幸いである。

2 曲目は、シューマン、ブラームスと同時代のガブリエル・ラインベルガー（1839-1901）の小品。ラインベルガーは、リヒテンシュタイン公国に生まれ、ミュンヘン音楽院で作曲、オルガンの教授を務めた。同時代の 2 人の巨人に隠れ目立たないが、多くの合唱曲を残している。この「夕べの歌」は、15 歳のときの処女作であり、彼の最もポピュラーな曲で、大変美しい和声に魅了される。歌詞は、ルター訳の聖書からのもので、復活祭の翌日のミサで歌われる。

3 曲目「エッサイの根より」の作曲家、アルバン・ベルク（1885-1935）は、ウィーン生まれで、十二音階技法で知られる新ウィーン楽派に属する作曲家である。ベルクは、歌劇「ヴォツェック」で成功を収めるが、ナチスに「退廃音楽」の烙印を押され、50 歳で不遇の死を迎えた。原詩は、聖母マリアを讃えるドイツ伝承キャロルに基づき、プレトリウス（1571?-1621）がプロテスタント向けに作曲・編纂して広まったもので、多くの作曲家が曲を書いた。ベルクの曲では、最終行がマリアを讃える原詩のものになっており、曲は、十二音階技法に調性を残した彼の特徴を示す、和声的・コラール風の美しい佳品となっている。

最後の「荒野の娘」は、ドイツ近代を代表するひとり、フーゴー・ディストラー（1908-1942）の代表作「メーリケ合唱曲集」からの 1 曲。ディストラーは、福音教会音楽家として名高く、多くの宗教曲を書いた。彼はナチスに入党したが、複音楽、メリスマ、5 音階などの技法から、ベルクと同様に「退廃音楽」の烙印を押され、34 歳で自死した。彼の作品は、現代のドイツの合唱団では良く歌われている。詩は、田舎の娘が、別れた恋人の結婚式を、妹を連れて荒らしに行くお話（今回、第２節は省略）。２拍子系と３拍子系が複雑に入り混じり、第４節では、新しい恋人との踊りを見せつけて、加えられた ha-ha-ha の囃子言葉がさながら近代のマドリガルといった風情の、楽しい曲である。　　（橋本 光廣）

III. ブラームス：運命の歌　作品54

第3ステージの曲名、「運命の歌」のドイツ語原題Schicksalsliedは、「Schicksal」が「運命」で、「Lied」が「歌」を意味する。「運命」の音楽と言えば、ベートーヴェン交響曲第5番「運命」を連想するだろうが、ドイツ語でも「Schicksalssinfonie（運命交響曲）」と言われており、ブラームスはこのことを意識して「運命の歌」を作曲し、ドイツ語圏の人も、この曲の題名を聴いたときに、楽器による「交響曲」に対して、「歌」が語る「人間の運命」なのではと感じただろうと想像できる。

この曲は、混声合唱と管弦楽（本日はピアノも加わる小編成で演奏する）のための楽曲で、歌詞はヘルダーリン（1770-1843）の小説「ヒュペーリオン」の末尾に挿入された詩「ヒュペーリオンの運命の歌」によるものである。1868年から1871年にかけて作曲され、1871年10月に初演されている。この時期、ブラームスは「ドイツ・レクイエム」op.45をほぼ書き終えており、本日演奏する「愛の歌」op.52の他、「アルト・ラプソディ」op.53、「勝利の歌」op.55など、彼の合唱曲の代表作群を作曲している。一方で、「運命交響曲」を意識して作曲していた「第一交響曲」op.68の制作も進めるなど、最も創作の盛んな時期であった。ヒュペーリオンの詩に感激し、大いに創作意欲を刺激されたと思われる。

本作品は二部形式となっている。第一部は管弦楽による天上の世界へ導くような美しい変ホ長調の序奏で始まる。しかし、「運命交響曲」の運命の動機を思わせる３連符が常に低音（本編成ではピアノ）で鳴らされており、天国的な情景が描かれる一方で人間の運命の影が見え隠れする。序奏が終わると、アルトソロが運命に縛られることのない天上世界の様子を歌った後、全パートが加わる。転調を伴って発展した後、音楽が落ち着く。

第二部では、変ホ長調から平行調であるハ短調（「運命交響曲」第一楽章と同じ）になり、天上の世界の対極にある人間世界の過酷な運命が激しい音楽としてユニゾンで歌われる。同じテーマが対位法的に発展を繰り返した後、『当所（あてど）なく落ちてゆく』という歌詞が二度歌われて音楽が落ち着き、管弦楽のみによるコーダが始まる。

コーダでは、第一部の天国的な序奏が、第二部のハ短調と同主調のハ長調で戻ってくる。このコーダは、『当所なく落ちてゆく』のが人間の運命であっても、人間にも希望が残っているはずだと作曲者が確信していたことを表現しているように思われる。しかし、その思いは、ベートーヴェンが「運命交響曲」の最終楽章（ハ長調）で「運命への勝利」を高らかに宣言しているのに比べると、控えめなものとなっている。　（筒井 丈雄）

IV. ブラームス：ワルツ集「愛の歌」作品52

第4ステージでもブラームスを演奏するが、民俗舞曲レントラーのテンポ（4分の3拍子）を基本とするワルツ集「愛の歌」作品52（1868-69）は、第3ステージの「運命の歌」とは趣を大きく異にする。

北ドイツ・ハンブルク出身のブラームスは1862年、29歳の時に楽都ウィーンに移った。ウィーンでは「ワルツ王」のヨハン・シュトラウス2世が絶大な人気を博しており、ウィンナワルツの優雅な響きがブラームスの重厚な作曲技法にも影響を及ぼしたことは想像に難くない。

「愛の歌」はピアノ4手（連弾）と混声四重唱のために書かれ、初版には「声は任意（ad libitum）」という指示があった。つまり歌はあってもなくてもいいということで、声楽愛好者にとってはやや残念だが、ピアノ連弾だけでも楽しめる曲にしたいという出版社の意向が働いたとの説もある。1874年には作曲者の手によるピアノ４手だけの作品52aが出版された。

「愛の歌」は18の小曲から構成され、歌詞はドイツの詩人で哲学者のダウマー（1800-1875）の訳詩集「ポリドーラ」から選ばれた。ブラームスはさらに1870年、ピアノ4手をオーケストラに編曲した管弦楽伴奏版を完成した。歌詞はオリジナルの18曲から8曲を抜粋し、新たにソプラノ独唱曲（後に「新・愛の歌」作品65の一部となる）を入れた9曲編成にした。本日演奏するのはこの管弦楽伴奏版で、独唱は割愛し曲順を若干入れ替えて演奏する。今回のために作編曲家でピアニストの内藤晃氏に、新たな室内楽伴奏版の編曲をお願いした。なお、プリエールは過去に1998年と2007年、「愛の歌」全曲をピアノ4手とともに演奏している。

1曲目には「レントラーのテンポ」という指示があり、室内楽と男声の導入部が印象的。2曲目は一転して愛のはかなさが、激しい川の流れに託して歌われる。3曲目（オリジナルでは第4曲）の女声合唱『美しい夕べの紅のように、こんな貧しい小娘の私だって輝きたい』と感傷的に表現する。5曲目（同第6曲）は『小さな、可愛い鳥』の喜びと悲哀の物語で、テナーのパートソロが聞かせどころ。怒涛の勢いの6曲目（同第11曲）では、世の中への不信と怒りが示される。7、8曲目（同第8、9曲）はいずれも穏やかな曲調で、ドナウ川の岸辺の描写で静かに終える。

ブラームスはことのほか「愛の歌」を気に入っており、出版社宛ての手紙に「実を言うと、印刷された自分の作品を見て、にっこりしたのはこれが初めて。『愛の歌』で喜ばない人がいるくらいなら、私はロバ（無能）呼ばわりされた方がいい」と記し、自作への愛着と自信を示した。　（宮脇 英朗）

プロフィール

黒岩 英臣（指揮） KUROIWA Hideomi

1942年東京生まれ。桐朋学園大学音楽学部指揮科において故斎藤秀雄氏に師事。1965年同大学を卒業後、修道士となり1975年まで修道生活を送った。その間、神学、哲学、ラテン語、グレゴリアン、ポリフォニーを学び、典礼音楽の指揮、作曲を行う。1976年、再び音楽に専念。全国の主要オーケストラとの共演を数多く行っており、安定した評価を得ている。自らが敬虔なキリスト教徒ということから、宗教音楽に造詣が深く、オラトリオ、レクイエム、ミサ曲等での名演を重ねている。2000年の年頭には、J.S.バッハ没後250年を記念し、東京オペラシティコンサートホールで「マタイ受難曲」を指揮し、「強固な信心に裏打ちされた演奏には、胸を打つ何かが響いてくる」と絶賛された。1981年～88年九州交響楽団、85年～89年神奈川フィルハーモニー管弦楽団、1988年～94年関西フィルハーモニー管弦楽団常任指揮者を歴任。2001年から山形交響楽団常任指揮者を務め、2004年から現在に至るまで同団名誉指揮者を務めている。また、1978年より2016年まで桐朋学園大学にて教鞭を執り、多くの著名な指揮者を育て上げた。1982年よりクール・プリエールの常任指揮者。今年で就任40周年となる。

クール・プリエール（合唱）Choeur Prière

1973年、東大柏葉会OBを中心に10数人で発足。初期の指揮者は栗山文昭氏。合唱団O.M.P.メンバーとして、1978年、1980年、全日本合唱コンクール全国大会にて金賞。1982年に黒岩英臣氏を常任指揮者に迎え、翌年、アンサンブル・ミニョン（女声）と合併、新生クール・プリエールとして再スタートし、 現在に至る。
主としてルネサンス期の宗教曲・世俗曲、ロマン派、近現代に至るヨーロッパのア・カペラ合唱曲をレパートリーに、繊細なアンサンブルを目指している。
1982年都民コンクール第一部門第一位、1983年同招待演奏（黒岩英臣指揮）、1984～87年宝塚国際室内合唱コンクール銅賞、TVEC（東京ヴォーカルアンサンブルコンテスト）1995年一般の部金賞、2000年以降では銀賞2回・銅賞3回入賞。

橋本光廣（指揮）HASHIMOTO Mitsuhiro

団内指揮者。在学中、東大柏葉会合唱団の学生指揮者を3年間務める。1972年の定期演奏会では、東大管弦楽団の伴奏でモーツアルト「レクイエム」を指揮した。1973年、仲間と共にクール・プリエール創立。1982年以降、同団を率いて各種室内合唱コンクールに出場、都民コンクール第一位、TVEC金賞など入賞を重ねる。2008年には、1971年混声六連にて指揮した三善晃「嫁ぐ娘に」が、NHK-FMにて放送された。2012年から柏葉会同窓会合唱団の指揮も務める。元富士通基本ソフト部門幹部。

内藤 晃（ピアノ・編曲）NAITO Akira

ピアニスト、指揮者。東京外国語大学卒業。弾き振りを含む多彩な演奏活動とともに、「もっと深い音楽体験」を共有すべく、ユニークな発想でレクチャーや執筆を行う。月刊音楽現代に「名曲の向こう側」を、日本音楽協会ウェブサイトに「作曲家の演奏美学」を連載。訳書にW.イェーガー編「師としてのリスト」（音楽之友社）、校訂楽譜に「ケクランやさしいピアノ作品集」（音楽之友社）、編曲楽譜に「G線上のアリア（ピアノ独奏版）」（ミューズ・プレス）などがある。CDに「Primavera」（レコード芸術特選盤）「言葉のない歌曲」（同準特選盤）などがあるほか、マリンバ吉川雅夫氏や作曲家春畑セロリ氏のCDでピアノを務め、一流ソリストや作曲家からも厚い信頼を寄せられている。教育楽器ユニット「おんがくしつトリオ」、CDレーベル「sonorité」主宰。http://www.akira-naito.com/

山根 あずさ（ヴァイオリン）YAMANE Azusa

神奈川県横浜市出身。4歳よりヴァイオリンを始める。これまでヴァイオリンを佐藤あかり、井上淑子、久保良治の各氏に、室内楽を山崎伸子、磯村和英の各氏に師事。モーツァルテウム音楽大学夏期国際音楽アカデミー、ヨーロッパサマーアカデミー等国内外のマスタークラスを受講。桐朋女子高等学校音楽科を経て桐朋学園大学音楽学部を卒業。桐朋オーケストラ・アカデミー研修課程を修了。現在、オーケストラや室内楽を中心に幅広く活動している。

金子 都（ヴァイオリン）KANEKO Miyako

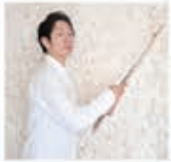
桐朋学園大学音楽学部音楽学科ヴァイオリン専攻卒業。桐朋オーケストラアカデミー研修課程修了。第 9回日本管弦打楽器ソロコンテストグランプリクリスタルミューズ賞(第１位)。第17回日本演奏家コンクール 特別賞 協会賞。第２回 K室内楽コンクール優秀賞。ヴァイオリンを御木マドカ氏、石井志都子氏に師事。現在、洗足学園音楽大学嘱託演奏員、神奈川チェンバーオーケストラ所属、STANDUP! ORCHESTRA (Sony Music Entertainment) 所属、横浜広間演奏会会員。

大森 悠貴（ヴィオラ）OMORI Yuki

桐朋学園大学音楽学部を経て、同大学院を修了。2022年小澤征爾音楽塾メンバー。Thomas　Riebl氏、今井信子氏のマスタークラスを受講。トリトンアーツ若手支援演奏家代表として東京文化会館アフタヌーンコンサートに出演。フリューゲルカルテットで2021年銀座王子ホール公演を行うなど室内楽に積極的に取り組む。これまでにヴァイオリンを原田幸一郎、神谷美千子、西和田ゆうの各氏に、現在ヴィオラを磯村和英、佐々木亮の両氏に師事。

安井 総太郎（チェロ） YASUI Sotaro

千葉県立東葛飾高等学校卒業。桐朋学園大学音楽学部卒業、同大学大学院音楽研究科修士課程修了。チェロを﨑野敏明氏、毛利伯郎氏に師事。室内楽を毛利伯郎、名倉淑子、木野雅之、菊地知也、磯村和英、銅銀久弥、神田寛明、北本秀樹、漆原啓子、加藤知子、長谷川陽子の各氏に師事。第4回K室内楽コンクールに於いて優秀賞を受賞。現在、リサイタルやオーケストラ、室内楽等で活動している。



岡本元輝 (フルート) OKAMOTO Genki

神奈川県立弥栄高等学校芸術科音楽専攻を経て、東京音楽大学卒業。第17回武蔵野音楽大学インターナショナル・サマースクール・イン・トウキョウにおいて、ミヒャエル・ファウスト氏のクラスを修了。講師推薦コンサートに出演。現在、オーケストラ、吹奏楽、室内楽、指導などで活動している。BodyChanceアレクサンダーテクニーク教師養成音楽プロコースを卒業。教師資格を取得。https://www.okamotogenki.com/

竹内彬（クラリネット）TAKEUCHI Akira

音楽博士。群馬大学教育学部音楽専攻卒業。パリ・エコール・ノルマル音楽院コンサーティスト高等ディプロムを取得。東京音楽大学大学院修士課程および博士後期課程を修了。芸劇ウインドオーケストラアカデミー修了。クラリネットを菅生千穂、海鋒正毅、ギイ・ダンガン、三界秀実、四戸世紀の各氏、音楽学を藤田茂氏に師事。研究の中心はドビュッシー、19世紀末前後のフランス音楽。
https://clarinetakeuchi.jimdofree.com/

《次回のお知らせ》

第39回定期演奏会（創立50周年記念）2023年9月18日（月・祝）2:00pm 浜離宮朝日ホール

ホームページ https://www.choeurpriere.com　お問合わせ　email: info@choeurpriere.com

＜表紙グラフィックデザイン： 菱沼彩子＞